篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年

13

マンガ編集者として

ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日（金）から29日（日）の会期で開催しました、新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやましたゆきおへ　マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

13、マンガ編集者として

もちろん肉筆マンガ同人誌「つれづれ草」の時も、「ふしぎな仲間たち」の時も、本を作るために編集作業はやっていたわけですが、それは自分のマンガを発表するための場を作るために必要でやってきたことで、編集者の立場からやってきた物ではなかったと思うのです。

そんな私に、仕事としてマンガの本の編集を発注してくれた人がいます。

一コママンガ誌「月刊ひとこま」

「ふしぎな仲間たち」を隔月刊誌の定期発行にしてがんばっていた頃、新聞でマンガ家の森田拳次氏が一コママンガ誌「月刊ひとこま」を自費出版していることを伝える記事を見つけました。

私は森田拳次さんにお会いして、「ふしぎな仲間たち」を見ていただき、発行趣旨に賛同いただき、一コママンガの作品を寄稿していただきたく、新聞記事に書いてあった連絡先の高田馬場の「猪まんがスタジオ」を訪ねました。

私の勘違いか記憶違いか、今となってはわからないのですが、訪ねたビルの事務所で私の話を聞いて対応してくれたのは、小林企画という編集会社の小林社長でした。

小林さんは、私の「ふしぎな仲間たち」の説明を丁寧に聞いてくださり、森田拳次さんを紹介してくださいました。

後日、森田拳次さんの仕事場を訪ねて、ご本人とお話しでき、ふしぎな仲間たちに一コママンガを寄稿していただきました。

森田拳次氏が自費出版をした「月刊ひとこま漫画通信」の創刊号（昭和51年6月26日発行）、第二号（7月26日発行）、第三号（8月26日発行）

聖悠紀氏にハムレットを依頼する

私は小林さんから連絡をいただき、再び高田馬場の事務所を訪ねました。

集英社のモンキー文庫というシリーズがあり、そこで書き下ろしの「マンガ版世界の名作」という企画を編集者として手伝ってもらいたいとの依頼でした。

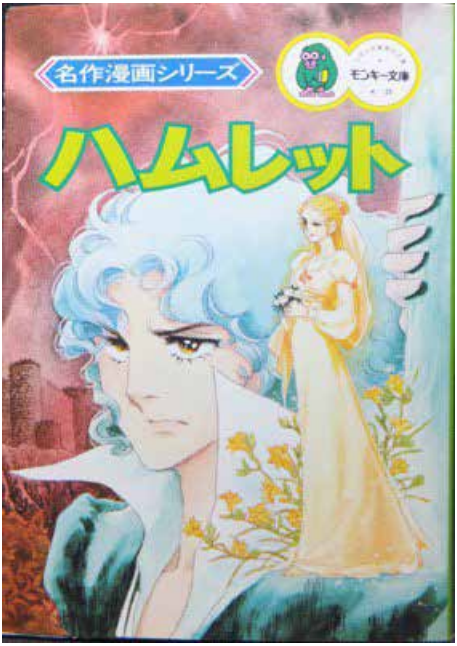
私か小林社長か、どちらのアイデアか思い出せませんが、「ハムレットを聖悠紀に描かせよう」いう企画が決まり、私が発注から入稿までの編集作業を外注で引き受けることになりました。

小林さんは私を編集者として扱ってくれた最初に人でした。

「ふしぎな仲間たち」をやることで、北九州の「あず」や大阪の「作画グループ」などのアマチュアのマンガ集団と少しつながりができていましたが、友達の友達はみな友達だ的なもので、聖さんと面識があったわけではありませんでした。

東京に出てきたばかりの聖さんを新宿の仕事場に訪ねるところからこの仕事は始まりました。

原稿を描いていただくのは大変でしたが、なんとか仕上がり、本になっています。



集英社モンキー文庫『名作漫画シリーズ ハムレット』集英社刊

セル画でマンガを描く

小林さんとは、それ以後仕事はしませんでしたが、細く長い関係はつながっていきました。

アニメーションで使うセル画ではなく、一枚のイラストを描く様にセル画を使って絵を描く手法があることを、私が小林さんに伝えたのだと思います。

本やマンガを読む前に、テレビでアニメを観ている幼い子供たちにとって、セルを使って描かれた絵は、親しみやすく、積極的に受け入れてくれる可能性があるとお話したことがありました。

アニメのセル画の手法を使った、日本の昔話や世界の童話の幼児向け絵本は、アニメ絵本として、本屋の店先を飾る様になって、定着していったと思います。

何年か経って、私は銀英社という企画編集会社にデザイン担当として参加していてて、サンライズの「ガンダム記録全集」や小学館の「サンデーグラフィック」や徳間書店の「テレビランドの表紙」など、デザイナーとして一定の仕事を頂ける様になっていたころ、小林さんから再び連絡を頂きました。

高田馬場の事務所へ行くと、場所が変わっていて、大きなビルのワンフロアーを借り切っていて、若いスタッフが忙しそうに動き回っていました。

集英社のマンガ版入門百科を全面改定していて、全ページセル画を使ってマンガを作っているとのことでした。

私には、「鳥のなかま」を一冊、マンガ家として参加して欲しいとの依頼でした。

私の仕事は、キャラクター設定と全体の構成・コマ割り、キャラクターのスミ線だけペン入れをする、というものでした。

これならなんとか出来るだろうと引き受けました。しかし、デザイナーの仕事とマンガ家の仕事は、全く違う思考回路を使う物でした。その切り替えがうまく出来ずに、結果両方の仕事の締め切りを遅らせ、大変な迷惑をかけることになってしまいました。

「鳥のなかま」を最後に私はマンガを描く仕事は引き受けないことにしました。

小林さんは、私に最初に編集者としての仕事を、最後にマンガ家としての仕事をさせてくれた方です。

なぜなぜ理科学習まんが7　鳥のなかま　集英社刊